

Dokusyo-nissi Bessitu

2004-01-27 φ(-_-)

■[memory]石切場(1)

これから書くことは 母親の 記憶を通した 小さな思い出である。

ぼくの生まれたのは、瀬戸内の ちょうどまん中あたりの島だ。

かつて 宮本常一が書いていたが、このあたりは 島の大きさと比べて なぜか人口が多い。ときどき どうして暮らしを たててたのか 疑問に思うことがある。

ぼくの祖父は あまり家族というものに めぐまれず、小さなときから 親戚を たらいまわしにされた。十代なかばより 徒弟について 石切場の仕事を おぼえたらしい。

母は 愛媛の生まれだが、ものごころ ついたころには、すでに島で暮らしていた。

はじめ祖父は 親戚筋をたよって 島での仕事を はじめたが、大正の終わり頃には 親方として 独り立ちと なっていた。

最初の妻が 子供を三人残して 急に亡くなり、それを気にかけて人の世話を 祖母が嫁いできた。

祖母は二人姉妹で 近所でも有名な美人であつたらしい。姉の方は ***小町と呼ばれていた。彼女は 姉と違い 一生結婚するつもりはなかった。そのため 踊りと鼓の稽古に身を入れていた。

ぼくの母はそのころ まだ乳飲み子で、それを見て祖母はどうにかしないと、と思って嫁ぐ決心をしたようだ。

祖父は しっかりとした考え方のできる人間であった。だが小学校も そこそこに実生活に入ったため読み書きが十分でない。そのため帳場の書きつけなど 日常に不便がない程度になるまで 祖母が字の読み書きを教えたと聞いている。

2004-01-28 φ(-_-)

■[memory]石切場(2)

石切場での仕事を こどもの頃の記憶をたどって書いてみよう。

まず どのくらいの大きさを切り出すかを考え、また崩れたときの衝撃を できるかぎり少なくすることも計算する。

そして見当がついたら そこに穴を穿ってマイトを仕込む。逃げる時間を見計らって導火線の長さを調整し点火する。

火薬が爆発し石の大きなかたまりがゴロンと切り出され - 作業中は こどもは近づけなかったのが正確には再現できないが - ここから後は また別の段取りになる。

危険な仕事なので、たまに けが人がでることがある。そんな時は運送用の石船をたてて町まで運んだ。

祖父の現場では けが人は少なかつたろうと思う。

他の石切場では とにかく掘れるだけ掘りかえす、というところも少なくなかつた。そのために地面に大きな穴があいて雨水で池ができたほどだ。当然 地盤は弱くなり山が崩れる確率も大きい。事故も起きやすい。

祖父は そこまではしなかつたし、また先を考えて手つかずの山を常に用意して仕事をすすめていた。

2004-02-03 φ(-_-)

■[memory]石切場(3)

祖母は結婚後も踊りの稽古を続けていた。神戸に師匠に あたる人がいて、ときには母をつれて通っていた。花柳流でも だいぶ上の人らしく兄弟弟子には歌舞伎の役者さんもいたとのことだ。

島でもときどき頼まれて こども達の稽古をつけていた。そんな時、母は後見としてくつついていた。

祖母は母に踊りの跡を つがせるつもりなどなかつたが、いつも くつついてきてたので、一通り以上は できるようになつたらしい。後年、母と二人で連獅子を踊るのが夢だつたと語っている。

祖父といっしょになつて しばらくして副業として家で小さな料理旅館をひらいた。わりと はやつたらしい。祖母はただ玄関先で客を迎えてあいさつするだけである。のんびりしたものだ。

2004-02-06 φ(-_-)

■[memory]石切場(4)

祖父と祖母が所帯をもつたころには、少しずつだが この島の花崗岩が石屋の世界でも認められてきた。***御影は上等ということで、たしか靖国神社の大鳥居もこの島の産に決まつたはずだ。

島の外から 多くの人が集まつてきた。朝鮮からも移民があつた。彼らだけの集落をつくつて、コケラ石の加工を専門にしていた。

祖父は自分たちの住いを 作業場の近くへと移した。土地を借りすでに完成してゐる母屋をそのまま そこへ移動させて据え付けた。

すこし高台にあつたので、はじめは水を運んできて生活をしてた。あるとき、母がスコップで庭の土を掘りかえしてると すぐに下から水がわいてくる。祖父にいうと、さつそく町から職人を呼び井戸を掘らせた。島ではあるが 花崗岩の割れ目を通して浸みでるので少しもしよっぱくない。逆に町のほうが 三角州の上にあるので、水道水でも塩からかつた。水量も豊富で1メートルぐらい下まで井戸の水面が上がつてきたそうだ。

家は作業場の そばに移したが、祖父は仕事と家族の生活とには一線を画していた。ただ若い衆の食事のときだけは別である。母は みんなのまわりでチョロチョロと動きまわつてたらしい。単に母が兄弟で一番小さかつたからかもしれないが。

家族が祖父の仕事場にかかわるのは、月末の手当の計算のときである。兄弟3人がそろばんをそれぞれ机の上におく。祖父が金額を読み上げ、みんなは そろばん玉をはじいていく。それで確かめたあとで、祖父は封筒に手当の金を入れていった。

2004-02-11 φ(-_-)

■[memory]石切場(5)

祖父と祖母は それぞれ違ったかたちで こども達に愛情を注いだようだ。

仕事を終えて帰ってくると、「いまから海にいくぞ」と声をかける。母は急いで水着に着替えて、二人で外にでる。家から2、3分歩けば 海岸である。

「片手をおれの肩に添えておけよ」というと祖父は平泳ぎで沖へと向かう。内海なので夜の海は凪いだ。母はまだ 三つか四つである。星明かりの下を泳いでいくと、まわりには夜光虫がただよっていて とても美しい。これを見せたかったのかもしれない。

祖父はまた、母をどこにでも連れていったようだ。家には駐在所の警官が、居心地がいいのか、いつもたむろしていた。祖父はときどき島の博打場に遊びにいった。

母が家で遊んでいると、警官が入ってきて祖父を連れ帰るようにいわれる。トコトコ歩いて博打場に行く。そこで、祖父のアグラをかいた足のあいだに母がチョココンとすわると、祖父は なにも聞かずにしばらくしてから外にでる。そして二人が家に着いたころには博打場に 警察の手入れが入る、という算段である。

2004-02-16 φ(-_-)

■[memory]石切場(6)

祖母も、祖父に負けじと母を連れ出した。神戸の 踊りのお師匠さんの家というのは、じつは朝日麦酒の社長宅である。そのころ母と同じ年頃の男の子が そこにいて、祖母が稽古をしている間、遊んでやるといっては よく泣かしたらしい。

母は体も弱くて小さかった。学校へはいる前は、郵便船で毎朝わざわざ牛乳を配達してもらっていた程である。

あるとき、母がいじめられて泣いて帰ってくると、祖父が「自分が悪くないなら、けんかに負けて帰ってくるな!」と怒ったらしい。それで次にその子に いじめられたときには、足をつかんで絶対に離さなかった。いくらたたかれても、しがみついていたので、最後にはその子のほうが泣きだしてしまった。

それからは、あいかわらず体のほうは弱かったが、イタズラ好きの活発な性格になっていった。

神戸の男の子も少し線が細かったので、母のイタズラの犠牲に なってしまったのだろう。

また、祖母はときどき母を正装させては、少し遠い町へ 出かけることがあった。レストランで二人、食事をするためである。祖母はけっこうハイカラで、いつも タンシチューを注文する。それで母は「タンシチュー」ということばを覚えた。ただし それがどんなものであるかを知ったのは、ずっと後のことだ。

2004-03-05 φ(-_-)

■[memory]石切場(7)

祖母は結婚する前から習練としてだが、踊りを身につけていた。一方、祖父は若いときから働きにでていたので、仕事一筋かということ、そうではなかった。

ある時は 河鹿を飼っていて、その鳴き声を楽しんでいた。河鹿はけっこう繊細で餌のハエも イエバエではなく花の蜜を吸うコバエでなければ食べない。コバエを捕まえるのは母の役目である。ソット近づいて 手のひらで一瞬に捕まえる。何度かやってるうち百発百中になっただけだ。

また煎茶にもこったようだ。手先も器用で ある種の木 - 名前は失念した - を加工して専用の盆をつくる。煎茶は一杯目は飲まずに捨てる。それを盆にあけて 茶渋を木に染みこませる。

幾度かくり返すと 茶渋の色が盆につく。そして母の出番だ。柔らかい布で磨きこむといい色をした煎茶用の盆が できあがるというわけだ。

2004-03-09 φ(-_-)

■[memory]石切場(8)

母が生まれたのは 日中戦争が始まった頃だ。そしてこの時期以降、中国東北部から大豆が大量に輸入されるようになった。どんな町にも豆腐屋ができ、豆腐は誰もが口にできるものになった。

友だちに豆腐屋の娘がいたので、母は毎日のように そこに出かけた。店の裏側の塀が壊れていて その穴から出入りできる。

豆腐屋では豆腐のほかにはアゲもつくっている。それを母は飽きずに見ていた。

まず豆腐をうすくそいで 三角に切る。それを天板に張り付けて水気をきる。油は高温と低温の2槽を用意しておく。はじめに低温のほうで しばらく揚げておいて、つぎに高温の槽に移して揚げ色をつける。

ときどき揚げたてをもらえることがあって、それはとてもあまくて おいしいものだった。

少しずつ母をとりまく世界が広まっていった。

祖母もそうだが、女性で習い事で身を立てる - 結婚だけを人生の目標としない - 人たちが増えてきていた。

島にもお茶やお花を教える人がでてきた。そのなかに修行の途中で病気になり やむなく島に帰ってきた女性もいた。彼女は無論のこと、腕もしっかりしており、ときどき町に出稽古にでかけていた。

普通、女子の稽古始めは 6歳、すなわち小学1年である。家の生活も安定してきたので、姉が お茶とお花の稽古を始めることになった。2人姉妹なので、母もいっしょに習うことにした。付き添いである。

姉のほうは あまり身が入らなかつたらしい。母はというと、ちょっと変わった遊びを見つけた、といった感じだ。踊りのほうで 一応の立居振舞は身につけているから、座って

稽古をするのは苦にはならない。

しかしまだ 4歳や5歳である。さすがに花、というより梅の木などを挿すときには困った。手が小さすぎて 矯めがむずかしいのである。それでも小学校に入る頃には奥 - 免許皆伝 - までいった。

結局、母は稽古事では 身を立てることはなかった。終戦後のことだが、祖母は母に裁縫の学校に入ることを勧めた。そのことが生活に役立つと。祖母には 自分が育った時代と、母が育った時代との違いが はっきりと判っていた。

2004-03-13 φ(-_-)

■[memory]石切場(9)

母のまわりの小さな世界にもいろいろな人がいた。

親戚筋には若くして精神を病んだものもいる。まわりからは神経さんと呼ばれていた。

しかし まともな人間のほうが恐ろしいものだ。親戚うちには小さな兄弟たちにあらぬことを吹聴して祖母との仲を裂こうとする輩もいた。祖父はこれらの いわゆる本家筋の人たちが生活で困っていると、わからぬように援助をしていたが、そんな讒言には一切耳を貸さなかったようである。

病人といえば、肺病を患い島に帰っている若い人がいた。母親と2人で住んでいて病後の養生を続けていた。

母はけっこう その人にかわいがられていたらしく家まで遊びにいつていた。部屋にはいると三方が本棚である。それは天井いっぱいまであり、ぎっしりと書籍がつまっていた。

母に本を読むようにすすめ、子どもにも読めるような世界文学を貸してくれた。一冊一冊、石灰で消毒して日光にあててから渡してくれた。

母は本のタイトルや内容は ほとんど覚えてはいない。だが少し大きくなって本を手にとってみると、かすかに読んだ記憶がよみがえってきた。レ・ミゼラブルもそのうちの一冊だ。

2004-07-25 φ(-_-)

■[memory]石切場(10)

以前、あるテレビ放送で 島が紹介されたことがあった。そのとき石切唄というのが、古くから伝えられているというナレーションつきで、地のひとたちによって うたわれた。

母は石切場の娘だが、そんなうたは聞いたことがなかった。こういうことはよくある。近くの ***島の踊りも、わりと有名だが、実際には戦後さかんになったものだ。

島の盆踊りでは、全部で10以上もの盆踊り唄があり、それぞれ踊りの手が違っていた。半世紀以上たった現在では おそらくそれらのすべては散逸してしまったことだろう。

すこし変わった踊りではお経を唱えながらおどるものもある。背中に仏壇に見立てた箱をしょって広場をぐるぐると回る。

ちょっと陰気なので母はあまり好きではなかったようだ。

2004-09-06 φ(-_-)

■[memory]石切場(11)

母がこどもの頃の旅、といえば琴平まいりだろうか。

祖父のしりあいでも文字どおり - 石船で生活している夫婦がいた。陸には住まず、食糧等の買出しのときだけ船を港にまわす。

祖父がたのむと、幾日間か他の仕事を断り、琴平まで船を仕立ててくれた。甲板のうちは掃除され、祖父と二人分がすわれる花ゴザが敷かれた。島から一日がかりで琴平の港まで船をすすめる。

覚えているのは、土産に買う菓子だ。ふだんオヤツとして持ち歩いてるのは、ガーゼの袋にいれてもらう いる豆ぐらいだ。これは泳ぎにいくとき水着にくくりつけてもらう。泳いでいるうちに、海水で適当に塩味がつくヤツ。

琴平の菓子は名前をヘソ菓子といって、小さなキンチャクのかたちをしている。なかに柔らかめの餡をつつんで揚げてある。上から見ると、ほんとにヘソに見える。

紙袋入りもあるが、母が買うのは土産用だ。そいだ木で編んだ籠にきれいな端切れが縫いつけてあって、袋の上を紐で絞ってある。土産店の店先につるしてあった。

これを何個も友達用に - もちろん自分用も忘れず - 買ってもらった。

あるとき台風が島を襲って、避難するのが遅れ、夫婦の船は ひっくりかえってしまった。おばさんは船からほうりだされて、亡くなった。

母はそのとき、身近な人の死に、はじめて悲しいという感情を抱いた。

2005-01-24 φ(-_-)

■[memory]石切場(12)

副業として経営していた料理旅館のほうも - それなりにだが - うまくいった。

港の近くに生簀を借り、祖父が漁船と話をつけて漁で魚が捕れたら適当に放りこんでもらう。一応は仕入値を取り決めているが、魚が何匹いても断らなかつたらしい。ときには生きがよすぎて、生簀から跳んで外海に逃げるヤツもいた。通いの板前がいて料理全般を仕切ってくれる。

客層はというと、関西方面からは画家、小説家や実業家も、また近くに軍港があったので軍人もよく泊りにきていた。あと、雉子(キジ)狩りのハンターが年一回必ず訪れる。

そのために旅館の地下には猟犬用の檻がこしらえてある。犬たちは普段はとてもおとなしくしていた。

軍港で観閲式があると、名目だけは女将なので、祖母宛に招待状が届けられる。断りきれないので そんな時には母親をつれて行った。セーラー服を新調してもらえてちょっとうれしい。祖母は美人だし、まあ小さなお目付け役だ。軍艦の甲板上でこの二人はよく目立っていた。

このころ中国との戦争が膠着状態になり、つづいて日米の間でも戦争が始まる。

この小さな島にも少しずつ戦争の影響が現れてきた。